

エッセイ「印象に残った手術看護！」（看護師の部）

最優秀賞受賞作

暖かい冷蔵庫

井上 陽愛

「手術室を見た時ね、大きな冷蔵庫みたいって思ったの。」術後訪問に伺った際に患者さんがそう言った。確かに、と思った。鉄で出来た重く大きな扉。中央にぽつんと置かれた無機質なベッド。真っ白な冷たい光が冷淡に注ぐ部屋。手術室は冷蔵庫に似ている。そこに一步入った途端、不安や恐怖で患者さんの心さえも冷やしきってしまうのだろう。

手術室看護師は、そんな患者さんの身体と心を冷やさないように、手術中の患者さんをよく観察し、暖かさを維持する役割を担っている。加温マットレスを使ったり、洗浄に使う生理食塩水を温めておいたり、手術中のモニターで体温を逐一確認して記録したり。手術室は冷蔵庫みたいだけれど、患者さんを冷やしてはいけないのだ。絶対に。身体的な冷えだけでなく、精神的な凍えも感じさせてはいけない。

患者さんが手術室に入室してから手術が始まるまで、決して長くはない限られた時間の中で、「私達が傍で着いていますからね。」「リラックスして大きく深呼吸しましょうね。」と声をかけること。患者さんが麻酔から目覚めた時、「無事に終わりましたよ。大丈夫ですよ。」と肩に手を添えること。それらの行動がきっと患者さんの心を暖める。凍えずに、震えずに、身も心も暖かいままで病室に戻って欲しい。私はそれを支える手術室看護師でありたい。

「手術室を見た時ね、大きな冷蔵庫みたいって思ったの。でもね、全然寒くはなかったわ。」笑顔で話す患者さんを見たあの時が、手術室看護師としての使命を強く感じた瞬間だった。

（講評）

無機質な感じの手術室を冷蔵庫に例えた患者さんの言葉から、手術室の描写と看護をリンクさせて“温かい冷蔵庫”にしている看護師たちの姿が思い浮かべられる作品でした。

身も心も寒くなると想定される患者さんが置かれる状況から、手術室看護師が体温管理や心理的支援によって、患者さんが不利益を被ることがないように配慮し努めることの大切さや思いが伝わりました。

また、手術看護を实践するという自己の役割を認識して日々手術看護を实践されているのが大変よくわかりました。

エッセイ「印象に残った手術看護！」(看護師の部)

優秀賞受賞作

神の手

嘉村 克己

母が私の勤める病院で手術をすることになった。「あんた手術室におるとよね？手術することになったけん。よろしくね。」突然の報告に驚いたが、聞けば口腔内にできた小さなできものを取る手術を受けるとのこと。私は「全身麻酔だが今まで大きな合併症もないし、特に問題なく終わるだろうな。」と思ったし、母も「大した手術じゃないやろ。大丈夫やろ。」とあまり気に留めていない様子だった。

手術当日、母の手術は、まだ看護師になって2年目の若い看護師が担当することになった。私は他の手術を担当していたため、部屋の入口まで付き添ってから自分の担当の手術準備へ行くことにした。入室時、昨日まで気丈にふるまっていた母は見るからに緊張していた。私が声をかけても上の空で、表情も硬かった。私は担当の若い後輩看護師に「緊張してるようだから、よろしくね。」と声をかけて母が部屋へ入るのを見送った。

手術は無事に終わり、母は何事もなく退院した。退院してからしばらくたったある日、医療ドラマを見ながら母が「わたしの手術を担当した、あの若い看護師さんは元気ね？」と聞いてきた。「元気やけど、何かあったね？」と聞くと「よくテレビなんかでお医者さんが「神の手」とか言われよるけど、私にとってはあの看護師さんの温かい手が『神の手』やったよ。」と話し始めた。聞くと、初めての手術で不安と緊張が強すぎてほとんど何も覚えていないが、眠る前に手を握ってもらってものすごく安心したことだけは覚えている。心が救われる思いだった。あれこそが本当の「神の手」だと。

あれから10数年。母にとっての神様は結婚し、退職してしまっただが、私はこのエピソードを後輩に伝え、手術看護のすばらしさを伝えている。また、私自身も患者にとっての「神の手」になれるよう、今日もそっと患者の手を触れる。

(講評)

医療現場での看護師の重要な役割と、人と人との触れ合いが持つ力を感じました。作者は、看護師としての経験と家族との絆を通じて、患者さんにとっての安心感がどれほど大切かを述べています。特に、母親が手術を受ける際のエピソードは、看護師がいかにして患者の心を支える存在であるかを示しています。

一般的な神の手とは違う看護師らしい「神の手」という表現を用いて、若い看護師の温かい手が、患者さんにとってどれほど救いとなったかを伝える部分は、心に響くものがありました。このエピソードを後輩に伝え、手術看護の素晴らしさを広める姿勢は、看護師としての誇りと責任感を強く感じさせてくれました。

エッセイ「最印象に残った手術看護！」（看護師の部）

優秀賞受賞作

患者さんが感じる「いつも通り」という感覚

齋藤 慎

手術室経験3年目の時、耳が聞こえず、喋ることができない患者さんの外回り看護を行った。受け持ちとなる前日に病棟の記録から情報をとった。記録を見ると筆談でコミュニケーションをとっているようで、全くコミュニケーションをとることができない訳ではないことがわかった。さらに記録をみていくと、普段は手話でコミュニケーションをとっていることがわかった。その時、私は違和感を持った。手術という非日常が続く一大事に、少しでも患者さんにとってのいつも通りを感じてもらいたい。そんな考えが浮かんだ。

家に帰り、手話の動画を検索してみたが初めて手話に触れた私には難しかった。「一日で手話ができるようになるのは難しそう。せめて最初の挨拶だけは覚えよう。」おはようございます、齋藤です、よろしくお願ひします。その3つだけを鏡を見ながら練習した。鏡を見ながら、何をやってるんだろう。筆談をすればいいじゃないか。練習をすればするほどできる自信がなくなってくる。でも患者さんには少しでもいつも通りの気持ちになってもらいたい。手話の練習をやめたい気持ちと患者さんに少しでもいつも通りの感覚で手術に臨んでほしいという気持ちが揺れ動いていた。

手術当日、手術室入口で患者さんを迎えた。患者さんの表情は暗かった。そこで、昨日練習した渾身の手話を行った。正直なところうまくできた気が全くしなかった。しかしその瞬間、患者さんに抱き着かれた。喜んだ表情をしており、目頭に涙をためていた。その時、この患者さんにとってのいつも通りの感覚を持ってもらい、安心して手術を受けられるような行動をとることができたのだと感じた。

この経験から、患者さんに安心感を持ってもらうためには、患者さんにとっての「いつも通り」な感覚を持ってもらうことだと私は考える。手術看護歴10年となった今も、少しでも患者さんに「いつも通り」を感じてもらいたいと考えて手術看護を行っている。

（講評）

看護とは、その人に寄り添いながら世話をすることであるという、看護の本質が、看護師の努力する部分も含めて描かれています。

受け持つ患者さんに手術看護を実践するために情報収集を行い、患者さんに「いつも通り」を感じてもらうために、コミュニケーションを図る方法として、日常的に使われている手話の挨拶を覚えて実践するという患者さんへの向き合い方が、この手術室看護師さんの看護の姿勢を表していると思いました。また、患者さんが安心して手術を受けられるように、手術前から模索し、患者さんに寄り添った看護を展開しようとしていたことが素晴らしいと思いました。